

「ゲスト講演：ポストエディットは翻訳なのか」 受講レポート

2021年11月11日

Trados オンラインカンファレンスシリーズ 講演

「ポストエディットは翻訳なのか」

山田優 立教大学

ポストエディット（PE）に関する最新の先行研究の概要について、説明があった。

PEは人で翻訳（HT）とする根拠として、国際標準（ISO17100、ISO18587）に基づき翻訳者、チェッカー、ポストエディタも、「翻訳、言語学、言語研究もしくは翻訳訓練を伴ったそれ相当の学位を取得している者」、「前の翻訳関連以外の学位と2年の翻訳もしくはポストエディット経験を有するもの」、「5年以上の翻訳もしくはポストエディット経験のある者」と、その資格の上ではほとんど同じであることが挙げられる。

それでは誰がPEをやるべきか？という点において、プロ翻訳者同等のスキルを持ち合わせた翻訳者がPEをすべきではあるとなるが、「社会的誤解」、「コストの問題」、「気持ちの問題」など様々な問題が存在する。プロジェクトマネージャーの視点では、そもそもPEは機械翻訳（MT）の「尻ぬぐい」であり（Kelly, 2014）、「虚しい」（Moorkerns and O'Brien, 2017:109）とみられている。一方、HTは言語的かつ専門分野の知識を備えている人で経験豊かな熟練専門家であるとみられている。そのため、PEはHTに比較して報酬面でも劣っている。翻訳者の視点においても、HTとPEは異なる仕事という認識がある。

PE作業のより良いプラクティスのためには、Over-edit（過修正）を注意する必要がある。個人の好みに基づく修正をしすぎたり、作業者が考える品質基準よりもMT訳を修正しないように我慢しながら作業することが認知負荷にもなっている。MTの品質をHT用のMulti-dimensional Quality Metrics（MQM）によって評価することが有用である。また、HTの翻訳作業時間のうち、51%は固有名詞や原文の内容を理解のために必要な情報や原文に関連したジャンルや専門分野に関する情報などの検索時間に当てられている。用語集、スタイルガイド、翻訳メモリ、CATツールなどのPEに適切な作業環境を整えることが重要である。

以上